カポグロッシ展

GIUSEPPE CAPOGROSSI

1987年9月7日～9月19日

ジュゼッペ・カポグロッシ　――ロビンソンのフォークは曲らない――

ジュゼッペ・カポグロッシの作品が、1950年から死の年（1972）にいたるまで、すべてが Superficie（スペルフィッチ）（表面）と題されて、ナンバーが振られているだけであるのには、いささか驚かされる。もっとも、このことは、1967年に出版された大冊のモノグラフィ[1]や、1986年ローマでの回顧展カタログ[2]を見る限りでいえるのであって、これより古い資料ではこうは一貫していない。たとえばミッシェル・スーフォールの有名な序文のある1954年刊行のカタログ[3]では「アフリカのシンフォニー」「戦い」「分子間の空間」といった説明的な題名が散見されるのだが、それらの作品が、後の資料によると、すべて Superficie という題名にと勢揃いしてしまうのだ。おそらくは、ある時点で、なんらかのきっかけで、作者がすべての題名を「表面」に統一したのだろう、と思うほかはない。ほとんどの作品に Concetlo Spatiale(空間概念)と銘打ったのはフォンタナだったが、カポグロッシの題名術の方が、はるかに一貫性において、徹底しているのは事実である。

50年代以後の全作品を「表面」という題名に統一する、ということは、それがもはや、個々の作品の題名であることを超えて、すべての作品に通底している、ひとつの普遍的な概念であることを示すことにほかならない。54年のカタログにすでに「表面No.6」「表面No.20」といった50年代初期の作品図版もあることを思えば、この概念を作者が、きわめて早くから抱いていたことは事実だが、もし67年のカタログ・レゾネの際に「表面」に統一したと推測しうるとすれば、当時のミニマル・アートが志向した「表面」意識、つまりは、二次元の画面に奥行きのない平面の表現だけを許容する志向となんらかの関連があるやもしれず、そうとすれば、カポグロッシは、自分の50年以降の作品群が、若い世代の「表面」志向をとっくに先取りしていたことを主張したのである、と考えられなくもあるまい。

限られた時間ではイタリア語の文献の読めない当方としては、こんな下手なかんぐりしか出来ないのに恥じいるばかりだが、経緯はどうであれ、一括して「表面」と題されたカポグロッシの作品を、いま、あらためて見る機会を与えられて、その単純で明快な、繰返しの美学のなかに、爽やかな豊かさともいうべきものを発見するのはぼくだけではあるまい。カポグロッシの作品をはじめて目にした50年代末では、たとえばミッシェル・タピエが「もうひとつの芸術」として結集したアンフォルメル美術の風変りなイタリア種として把えられていた。「身振りの偶然が成就した冒険にたいして、カポグロッシは、もうひとつの形態学的構造化（ストリュクテュラシオン・モルフォロジック）というきわめて自立した探究を対置しているように思われた[4]」という、タピエのもって廻った難解な文章に接していた頃の話である。日本でも、いち早く1963年に東京画廊が個展を開いている。そのカタログ序文には針生一郎が「あなたの名は、もうわたしたちに親しい[5]」ではじまる、意外にも瀧口修造を思わせないでもない、いいテキストを寄せていて、当時のぼくらが、新しい外国の潮流にまっさらな瞳を柔かく開いていった雰囲気を思い起こさせた。「あなたの記号のもっとも顕著な特色は、心理的生活的な一切のものから解放されながら、生もののように無限に自己増殖をつづけてやまないことだろう。……[6]」(針生)。

それから四半世紀が過ぎて、もはやカポグロッシの名は「わたしたちに親しい」とはいえなくなってしまったが、記憶からたちきられて、いま、彼の画面がみずみずしく見えるのは、さまざまな美術動向の変遷をしり目に、作者が「表面」という概念をアリアドネの糸のようにたどり、たぐりよせ、たわむれてきた、その息づかいと身振りの、生ま生ましさと確かさのせいにちがいない。そして、また一方で、その後ウォーホルやステラや、あるいはヴィアラの繰返しの構造画面に親しんできたこちら

表紙：Superficie CP/812 1967　tempera nera su carta（キャンバスで裏打ちされた紙にガッシュ）70×50cm

の眼差しが、彼の絵を新たに発見し、受け入れはじめているのである。

1900年ローマに生まれたカポグロッシが、あの解読不能のアルファベット、フォークの先、あるいは猛禽の爪跡のような、独特な記号的形態をもとに作品を描きはじめたのは、1949年からだといわれている。それは、奇しくも、フォンタナがカンヴァスにはじめて穴をあけた年でもあった。それまでのカポグロッシは、ポスト・キュビスム風の空間をただよわせた、マネシエらと共通した抒情的な半抽象的画家であった。いや、もっと前を辿れば、1930年代は、ジュンティリーニ、カヴァルリ、オミッチオリらと共に「新ローマ派」に属する、表現主義的な色調の強い具象画家であった。そして、大戦直後の1949年、突然、それまでの作品の記憶を一掃するように、あの歯型の単位記号だけが登場する絵を描きはじめた時、その激変はひとびとを面喰わせたらしい。「彼はこれらのヴァリエーションを追究しつづけてゆくのだろうか、それとも、以前の試みとのなんらかの結びつきを作りあげるのだろうか」[7]と、当時、ある評家は、いささか残念そうに書いている。このとき、カポグロッシに何が起きたのかは、永遠の謎として残るが、いうなれば、キュビズトたちが1910年代に画面に描き入れたアルファベットの文字が、キュビスムの屈折した奥行きのある空間を抜け出て、「表面」である二次元の平らな画面に、独特に変形された、平面的な記号として出現したのである。

「1949年、功なり名遂げた画家の立場を投げ打って、パイオニアになったとき、カポグロッシには何が憑りついたのだろうか。突如として、全くの予兆もなしに、彼は具象を捨てて抽象に赴き、名声を闇に、安定した生涯を冒険に、技能を夢想に、安泰を未知の危険にと、とり変えたのである」[8]（ミッシェル・スーフォール）。

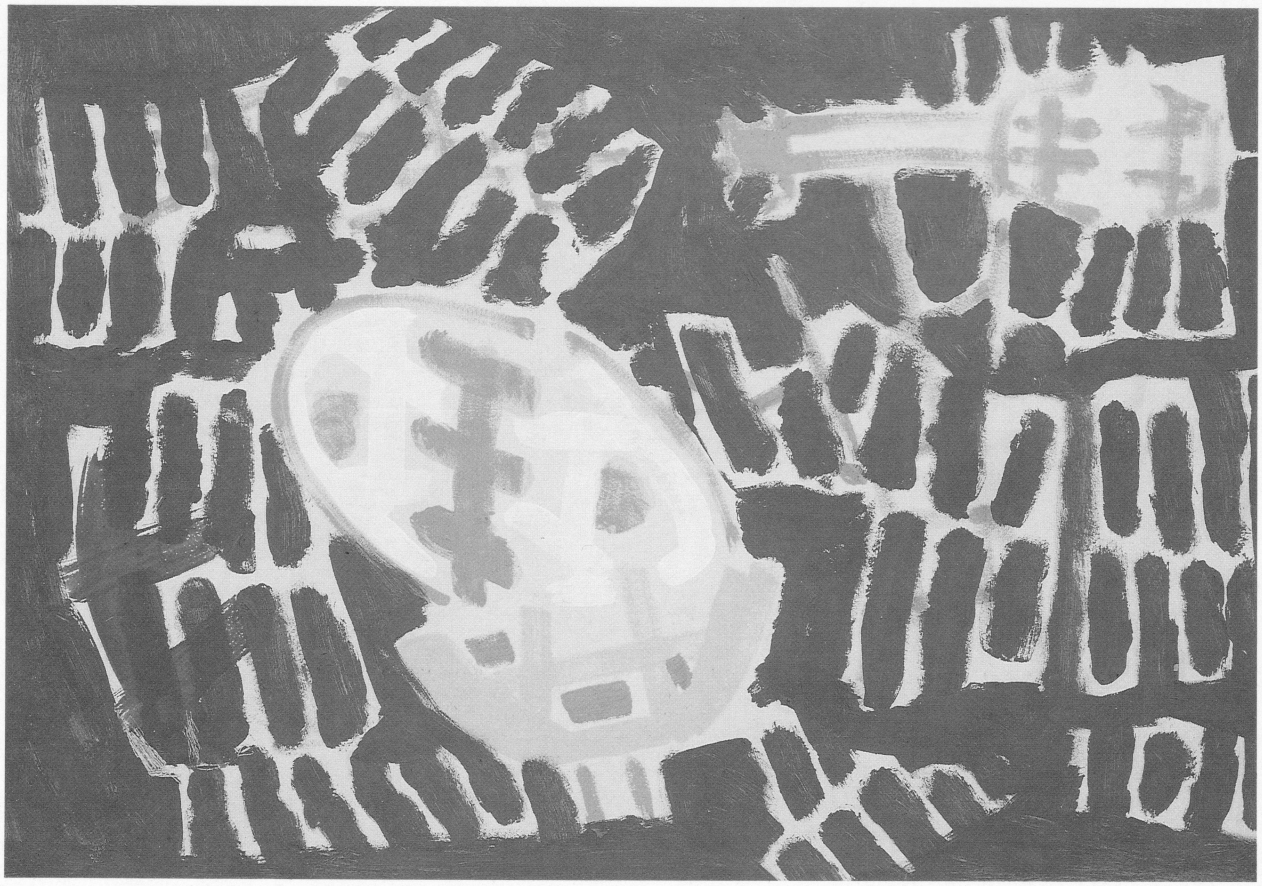
これ以後、カポグロッシは、ひとによってA、M、Wの字に似ているともいい、あるいは、三又槍、子供の手、花びら、爪跡、地図上の陣地、と、さまざまな連想を誘いながらも、それ以外のなにものでもない、あのカポグロッシ記号だけを使って、じつにさまざまな配列と組み合わせの作品を描きつづけていった。これほど、たったひとつの単位（コード）に自分を托しながら、どれひとつとして、退屈な反復を感じさせない、豊穣な作品群を織りつづけていった画家は数少ないだろう。この単一コードは、ある場合は整斉に並んでいるかと思うと、抗う人体のように絡み合い、あるいは白抜きの地になるかと思うと、カリグラフィックな奔放さを見せもする。紙に切り抜かれてコラージュやレリーフに仕立てあげられることもあれば、向きあった一組ががっぷりと嚙み合って、古代の単純な秘文字のように見えることだってある。そして、すべての画面にしみ通っているユーモアの露を見逃さないでほしい。乾ききった均質な色彩を切り抜いたともいえる、あの単純で生ま生ましいカポグロッシ記号の群が、まるで磁場の変化によってうごめき、離散し、蝟集する砂鉄のように、配列や組合わせを変えてゆくとき、ぼくらの眼差しは、けっして奥にひきこまれて焦点を結ぶことなく、この「表面」の上を、爽やかに揺蕩ってゆくだけなのだ。

注

① G. C. Argan "Capogrossi" (Editalia, Roma, 1967)
② "Capogrossi ; opere ad 1951 al 1972" (Galleria d'Arte Niccoli, Parma, 1986)
③ Michel Seuphor "Capogrossi" (Cavallino, Venezia, 1954)
④ ①に収録　P.23
⑤ カポグロッシ展カタログ（東京画廊、東京、1963）　頁なし
⑥ ibid
⑦ Guido Ballo "Modern Italian Painting ; Fran Futurism to the Present Day : (Thames and Hudsm, London, 1958)　P.106
⑧ ③の文献　頁なし

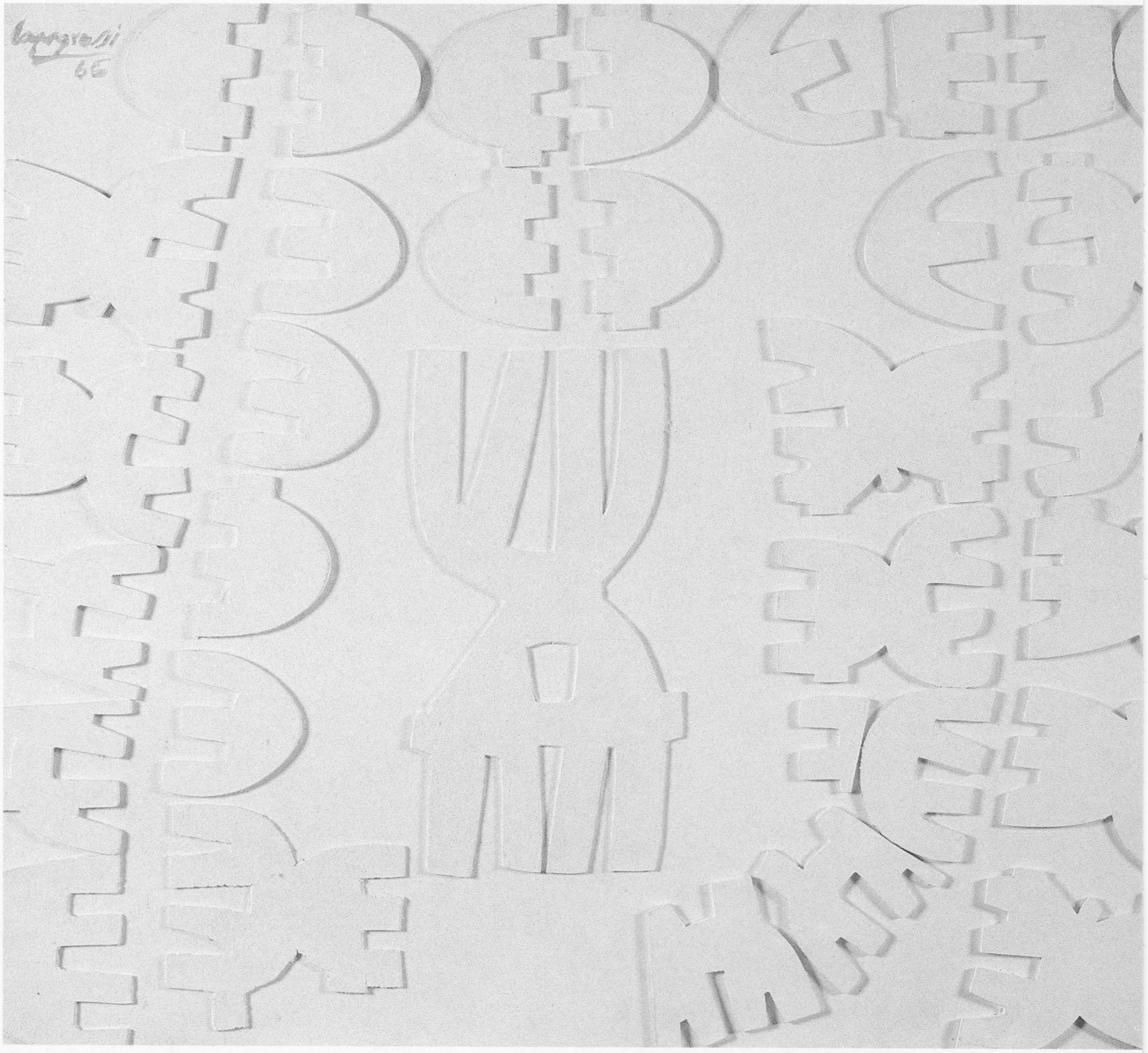
Sup. G/42 1945
tempera su carta（キャンバスで裏打ちされた紙にガッシュ）35×25㎝

Sup. CP/200 1953～1954
tempera su cartoncino（厚紙にガッシュ）35×50㎝



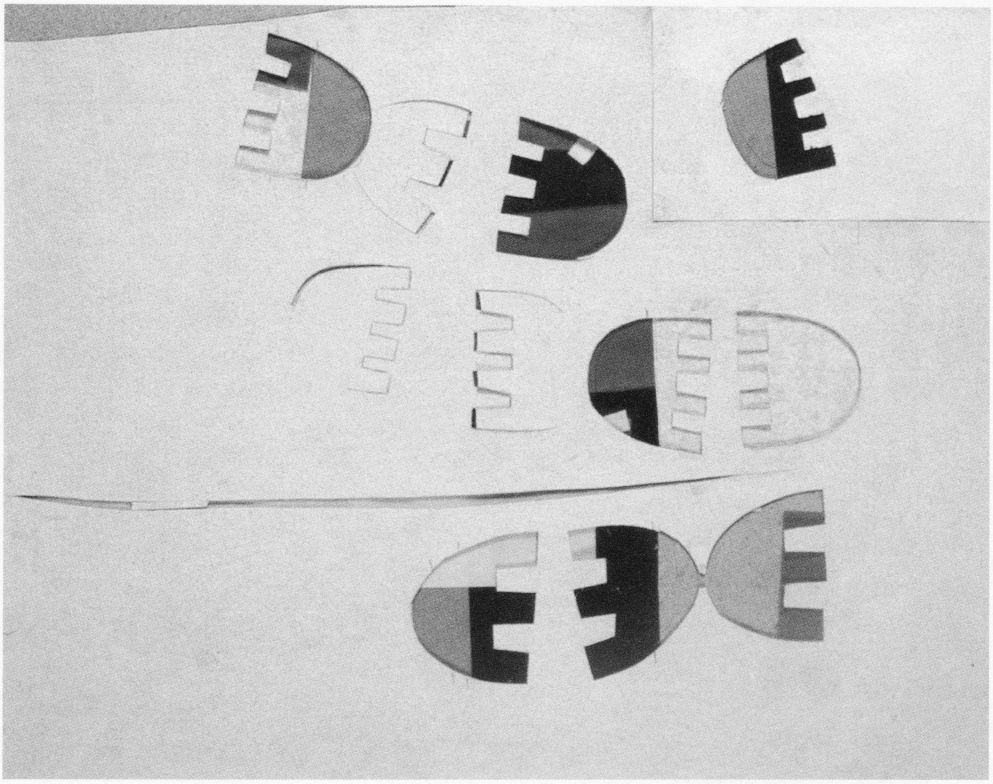
Sup. 671　1958

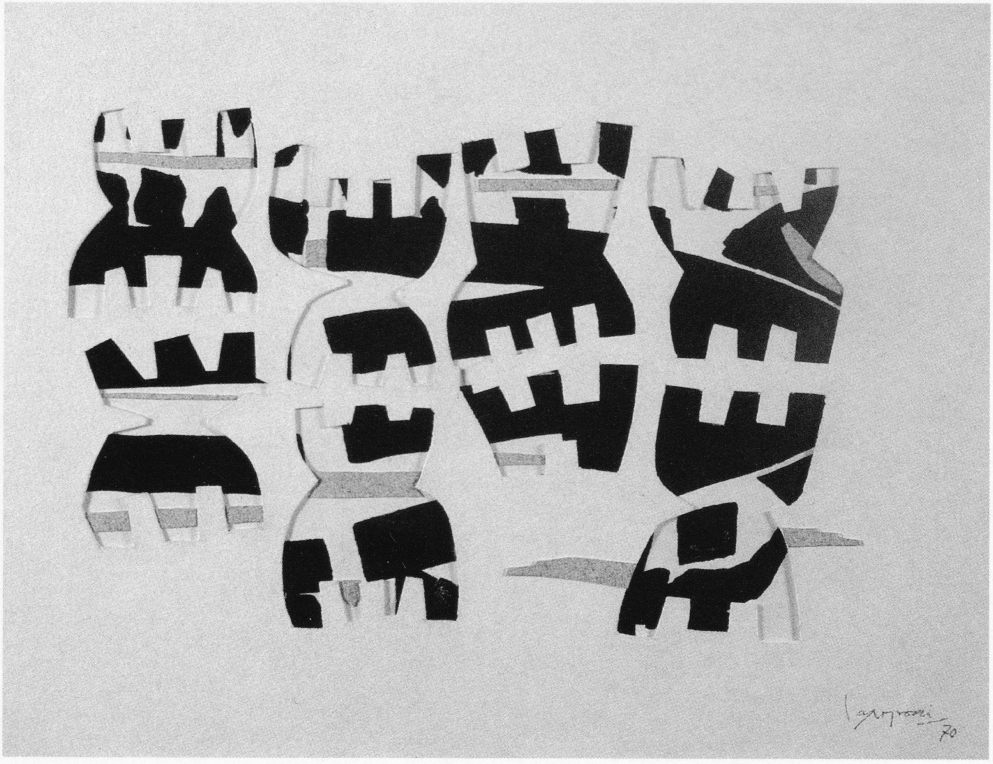
temperta（紙にガッシュ）　71×50cm



Sup. 570　1966
relievo（レリーフ）　50×65cm

Sup. 708　1970
rilievo（レリーフ）　59×72cm

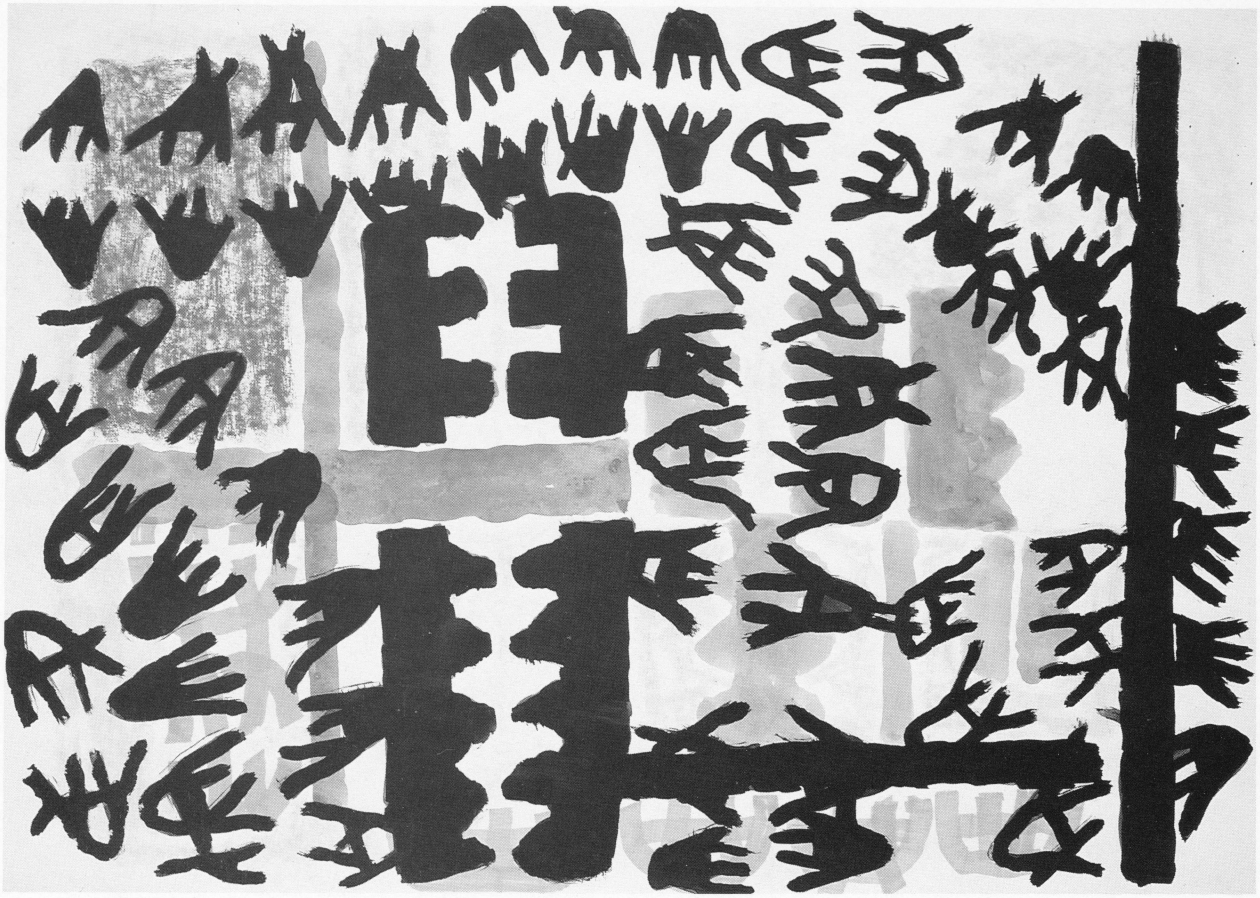


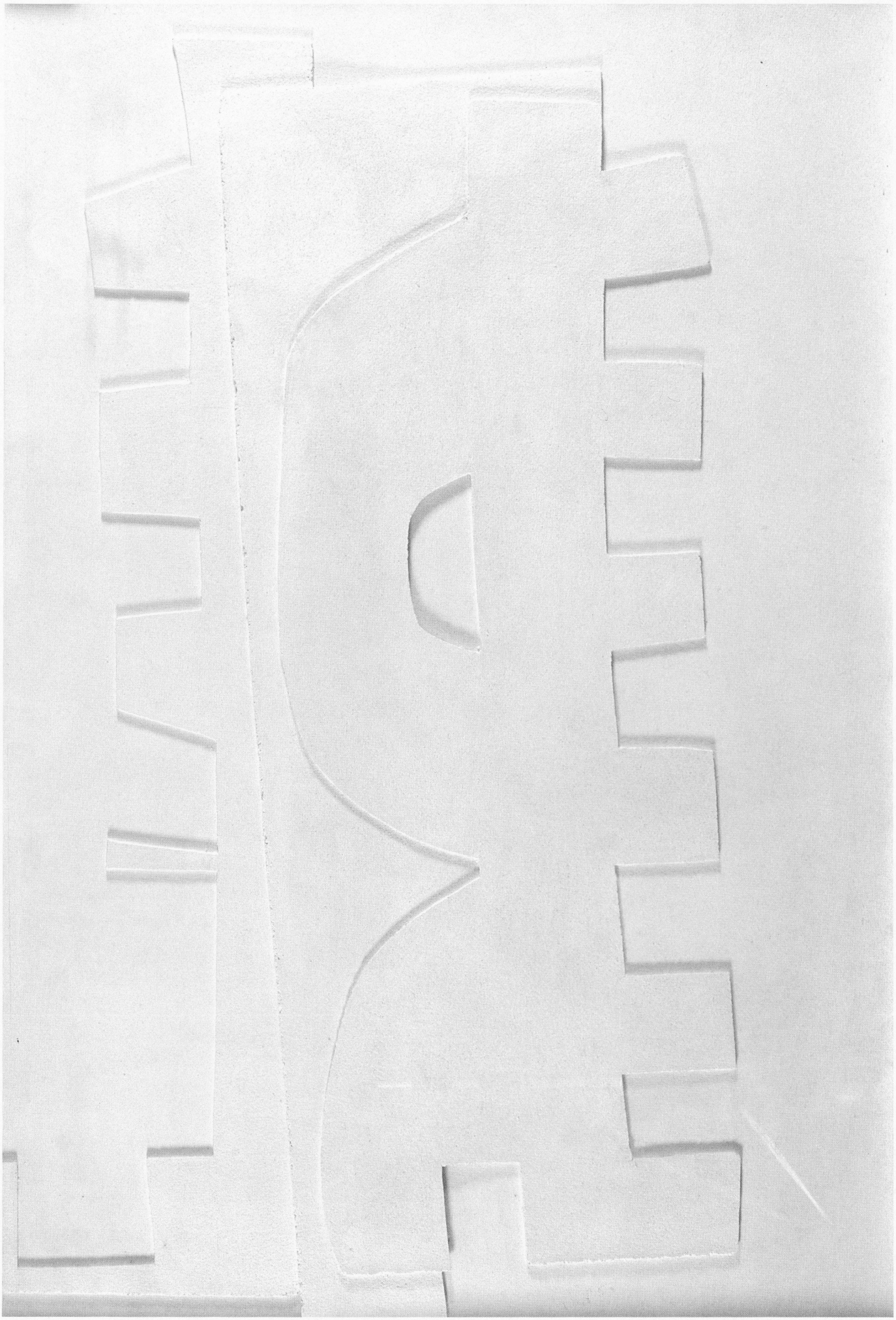


Sup. 690　1970
ero e cartone（コルクと厚紙のレリーフ）　61×72cm

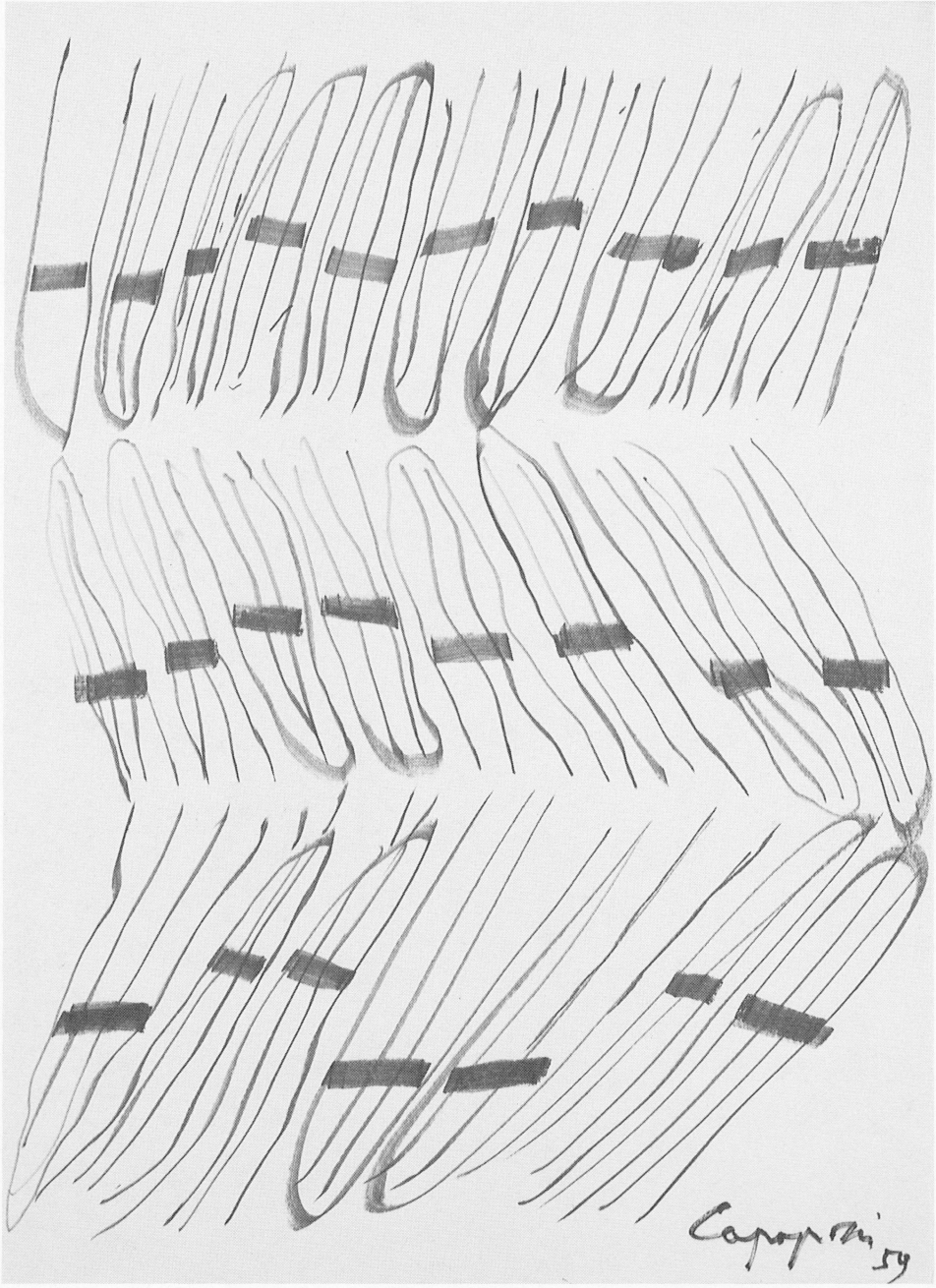
Sup. 616　1968
olio su tela（キャンバスに油彩）　14×22cm

Sup. CP/134　1956～1957
tempera su carta（紙にガッシュ）　35×50cm





Sup. 605 1967
rilievo（レリーフ）116×72cm


Caporossi 59

1900 Giuseppe Capogrossi 3月7日ローマ生れ
| ローマ大学法学部卒業
1926 Felice Carena のもとで絵画の勉強を始める
1927 ギャラリー Dinesen にて初めてグループ展に
1930 第17回ヴェネツィアビエンナーレ
1932 第3回 Fascista 芸術組合展
Cagli と Cavalli と出会い12月にグループ展
1933 2月にミラノのギャラリー il Milione と12月にパリのギャラリー
Jacques Bojan にて Cagli と Cavalli とグループ展
紹介文は Waldemar George 彼らのグループを〝ローマ派〟と名づけた
1934 第19回ヴェネツィアビエンナーレ
1935 第2回ローマ Quadriennale Nazionale 出品
1936 Cagli と Cavalli とのグループ展
第20回ヴェネツィアビエンナーレ
第6回 Fascista 芸術組合展
1937 第7回 Fascista 芸術組合展
1938 第8回 Fascista 芸術組合展
1939 第3回ローマ Quadriennale Nazionale 出品
第1回 Bergamo 賞に出品
1940 第2回 Bergamo 賞に出品
1942 第4回 Bergamo 賞に出品
1943 第4回ローマ Quadriennale Nazionale 出品
1946 戦争が終わり、ローマのギャラリー S. Marco にて個展
1948 第24回ヴェネツィアビエンナーレ
この時期から具象絵画に対して疑問を持ち始める
1949 抽象絵画を始める　オーストリアに数ヶ月滞在
ローマ、リンツ、ウィーンにてグループ展
1950 1月にローマのギャラリー Secolo にて、初めて抽象の作品を出品
その後、ミラノのギャラリー il Milione、ヴェネツィアのギャラリー
Cavallinoにて個展
第25回ヴェネツィアビエンナーレ
1951 Ballocco、Burri、Colla と共にグループ Origine を結成
パリ《Salon de Mai》
《激情の対決》パリ、ニーナ・ドーセ画廊
ミラノ第9回 Triennale 展
1952 ミラノの Spaziale に参加し、数回の展覧会に出品
第26回ヴェネツィアビエンナーレ出品
1953 《若いヨーロッパの画家》ニューヨーク、グッゲンハイム美術館
ミラノと Trieste にて個展
1954 第27回ヴェネツィアビエンナーレ Einaudi 賞受賞
M. Seuphor の文章で初めての画集出版
1955 第1回カッセルドキュメンタ
第3回サンパウロビエンナーレ
《新しい10年－22人のヨーロッパの画家彫刻家》ニューヨーク近代
美術館
1955 第7回国内ローマ Quadriennale Nazionale 出品
ヴェネツィア、ギャラリー Cavallino にて G. C. Argan の序文で個展
1956 《ハンガリーの芸術家のための美術展》ローマ国立近代美術ギャラリー
《世界今日の美術展》日本橋高島屋
1956 パリ、ギャラリー Rive Gauche にて個展
1957 第2回 Bari 賞出品
ロンドン、現代芸術研究所にて個展
《今日の水彩の動向》ニューヨーク、ブルックリン美術館
1958 ニューヨーク、レオ・キャステリ画廊にて個展
《近代美術の50年》ブリュッセル、国際美術宮
《グッゲンハイム国際展》ニューヨーク、グッゲンハイム美術館
《現代の絵画・彫刻国際展》ピッツバーグ、カーネギー研究所
1959 第3回ヴェネツィア版画ビエンナーレ　版画賞受賞
第2回カッセルドキュメンタ
第8回ローマ Quadriennale Nazionale 出品
第5回サンパウロビエンナーレ
Bruxelles の芸術館にて個展
1960 《現代イタリア美術》シカゴ、イリノイ工学研究所
《現代のイタリア絵画》リュツェルン美術館
東京国際版画ビエンナーレ出品
1961 パリ第17回 Salon de Mai
第4回ヴェネツィア版画ビエンナーレ
第12回 Lissone 賞出品
第6回 Termoli 賞出品
《4人のイタリア人》ケルン芸術協会
《第6回日本国際美術展》東京都美術館
1962 第31回ヴェネツィアビエンナーレ　大賞受賞
《イタリアの画家と彫刻家》ヴィースバーデン、国立美術館
M. Tapié の文章で2冊目の画集出版
1963 東京、東京画廊にて個展
《現代芸術展》パリ、グランパレ
1964 第32回ヴェネツィアビエンナーレ
《1954－1964 絵画と彫刻展》ロンドン Tate ギャラリー
《カポグロッシ／フォンタナ》大阪、グタイ・ピナコテカ
1965 第10回 Termoli 賞出品
《現代イタリア形態展》(巡回展)
St. Gallen にて個展
1966 《現代イタリア美術の展望》ローマ国立近代美術ギャラリー
1967 《現代イタリア美術展》東京国立近代美術館
Baden-Baden, Norimberga e a Berlino にて個展
第7回 Lubiana 国際版画展
G. C. Argan の文章と M. Fagiolo の企画で3度目の画集出版
1968 第34回ヴェネツィアビエンナーレ《Spazialismo》出品
《イタリアの100点の未来派から今日展》ローマ国立近代美術ギャラリー
《空間主義》ヴィツェンツァ、チェリカティ宮
1969 《最近のイタリア絵画と彫刻》アメリカ、ジューイッシュ美術館
第8回国際 Lubiana 版画展
《現代世界美術展》東京国立近代美術館
1970 《万国博美術展》大阪、万国博美術館
Torino にて《青い騎士展》
第2回 Firenze 国際版画展
ジュネーブにて個展
1971 第11回サンパウロビエンナーレ　20年賞受賞
第11回国際版画展　名誉賞受賞
文化活動の貢献により、イタリア文化省より金メダルを受ける
1972 10月9日、ローマにて死去
1974 国立ローマ近代美術ギャラリーにて200点の回顧展
1975 Palma Bucarelli と Bruno Mantura の文章で1930－1972の全画集出版
1979 Umbro Apollonio の序文で Pordenone 市にて回顧展
1982 《第14回日本国際美術展》東京都美術館
1986 パルマ、ニコリ画廊にて個展
《現代の白と黒》埼玉県立近代美術館
1987 鎌倉画廊にて個展

Centro Culturale Arte Contemporanea Italia-Giappone
チェントロ クルトゥラーレ アルテ コンテンポラーネア イターリア－ジャッポーネ
のご協力をいただきました。

カポグロッシ展カタログ
発行日　1987年9月7日
発行者　中村路子
製　作　鎌倉画廊

鎌倉画廊
中央区銀座7-10-8 平方ビル1F
TEL. 03-574-8307(代表)

カポグロッシ展

GIUSEPPE CAPOGROSSI

Kamakura Gallery 7-10-8Ginza, Chuo-ku, Tokyo Tel. 03-574-8307